

「科学者の社会的責任を考える」授業を作る

—広島をどうとらえ、どう教えていくか—

(5年計画の1年次)

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科

丸浜 昭・大野 新・小澤富士男
小林 汎・篠塚 明彦・宮崎 章
吉田 俊弘

「科学者の社会的責任を考える」授業を作る

—広島をどうとらえ、どう教えていくか—

(5年計画の1年次)

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科

丸浜 昭・大野 新・小澤富士男
小林 汎・篠塚 明彦・宮崎 章
吉田 俊弘

要約

今年度から新たに5年間の計画で始まった第二次スーパーサイエンスハイスクール(SSH)の研究テーマとして、社会科では『科学者の社会的責任を考える』授業作り」を掲げた。これは、第一次のSSHにおいて追究したテーマを授業に反映させることを目的としている。本稿は、その1年目として、20世紀に人類が開発した最も強大な科学兵器である原爆をとりあげた授業実践を報告する。具体的には、中学校1年生の地理的分野と高等学校2年生の日本史での授業である。

キーワード 科学者の社会的責任 広島 原爆 社会科学習 日本史 平和教育

1 はじめに

2002年に本校がスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の研究指定校となって以来、社会科では「科学者の社会的責任を考える」をテーマとして研究に参加してきた。SSHは一般には理数科教育の推進が中心課題とされるが、社会科において上記テーマを設定したのは、ますます複雑になる現代世界において、科学が持つ社会的な意味をとらえ直し、文系・理系にとられない広い社会的・歴史的な教養を持つ若者を育てることが重要だろうと考えてのことであった。そして、今年度から第二次のSSH指定校(5年間)としての研究継続が決定するに伴い、あらためてこのテーマの持つ意味をとらえ直し、引き続き取り組んでいくこととした。今次は、授業や総合的な学習の時間などを通して、生徒とともに学ぶ実践をより重視したい。

第一次の5年間の研究で、研究者を招いての講演会や授業などで取り上げてきたテーマには次のようなものがある。

*核問題 *生命倫理 *731部隊 *ナチス下の医学 *オウム真理教 *公害 *超常現象ブーム

これらは、社会科内の各科目でさまざまな機会にとりあげ、学び考えていくことができる。また、社会科の教員が関わる総合的な学習の時間などでも扱うことが可能である。これらに関して、教員がいっそう深く多様な教材の準備を行うとともに、生徒自身とともに学習を深める機会をつくることをめざしていく。

今年度は、歴史・地理・公民の各分野が総合的に関われるテーマ(地域)として、まず「広島」をどうとらえ学んでいくかを中心的なテーマとした。本稿では、2007年11月に開催された本校教育研究会において、このテーマにもとづく公開授業を行ったので、その概要を紹介するとともに、参加者からのコメントや次年度に向けての展望について述べる。

2 中学校で学ぶ原爆

(大野 新)

2.1 地理教育における平和教育と原爆

第二次世界大戦前・中の地理教育は戦争遂行のために利用されてきた。地政学は地理教科書にも反映され、大東亜共栄圏の必要性が強調された。戦後は、歴史教

Discussing the social responsibility of the scientists in the classroom
what was Hiroshima, and how should we teach it?

育と比較して、戦前の地理教育にたいする反省は不十分であった。

第二次世界大戦後、戦争への反省から、平和教育というジャンルが確立し、広島・長崎・沖縄・アジアの学習において地理教育が一定の貢献をした時代があった。しかし現在の地理教育においては、地誌教育が行にくい状況の中で、戦争や平和の学習に好適な沖縄・広島・長崎を地域として扱うことは難しくなっている。

このような現状の中で、地理教育において、原爆はどのように扱われているのだろうか。1970年代まで、地理教育で「戦争・平和」を扱うことを学習指導要領や教科書では想定していなかった。民間教育団体でも、地理教育を通じて平和を考えることをめざすという共通認識が定着したのは、1970年代後半になってからだった。その後、中学校においては、長い間地誌学習が中心にすえられていたことによって、広島や長崎における学習で原爆のことが教科書に取り上げられていた。たとえば、1996(平成8)年版中学校社会科教科書地理的分野(教育出版)には、広島に関して、次のような記述がある。

「広島は江戸時代、大きな城下町だった。明治以後は県庁所在地・文教都市として、また、軍事都市として発展してきた。1945(昭和20)年8月6日、原子爆弾がアメリカ軍によって、世界で最初に広島の中心部に投下された。町は破壊され、20万以上の人々が死亡し、今でも原爆症に苦しんでいる人々がいる。爆心地の付近にある平和公園には、『原爆ドーム』が当時のままの姿で保存され、平和への願いをこめている。第2次世界大戦後、人々の努力によって復興をとげた広島は、人口が100万人をこえる大都市となり、中国・四国地方の政治・経済・文化の中心地となっている。」

中国・四国地方の地誌学習の最初にとりあげられた広島の部分で通常の授業時間配当部分にこの記述があった。

しかし、次の改訂1999(平成11)年になると、広島を扱った部分は教科書の特設ページへ移った。内容は詳細になったが、特設ページは必ずしも授業時間内に扱わなくともよい部分なので、実質的にははずされたと考えてよい。戦後50年を経て、広島を原爆をテーマとして扱うことが風化してきたといえるだろう。

さらに、学習指導要領が大きく改変された現行版からは完全に広島の記述がなくなったといってよい。中学校地理的分野は、従来の地誌学習から調べ学習へと学習方法を大きく転換し、扱う地域も都道府県レベルで2～3となった。教科書によっては広島を扱ったも

のもあるが、原爆を教材とする平和学習は大きく後退した。核兵器廃絶の運動や原爆の問題は歴史的分野や公民的分野でのみ扱われるようになり現在にいたっている。

社会科地理的分野で原爆を素材として扱うことによどのような意味があるのか。その点に関していくつかの指摘をしておく。

①地理の学習において、対象とする地域がどのように形成されたかを認識することは重要な視点である。現在の広島の都市としての発達を考える上で、原爆が持つ意味を理解することは大変重要である。

②原爆がもたらした影響をとらえることは、地域を科学的に認識することにつながっている。いうまでもなく人為的に与えられた被害としての原爆を総合的にとらえることによって、戦争の被害を具体的に把握することができる。

③ますます風化する戦争の記憶をとどめるために原爆は重要な素材である。それは、世界的にみても重要だと思われる。また、単に原爆の被害を強調することだけではなく、客観的な視点を持つことでさらに意味を持つ。

そのような中で、柳田邦男著『空白の天気図』に出会った。この本の内容は、報告者にとってそれまでの原爆観を大きく揺さぶるものであった。また、直接主人公の北勲氏に会う経験もできた。そのような経緯から、今回、原爆をテーマとする学習のメインとして「科学的観測精神」をおくことにした。

2.2 中学校地理的分野での原爆の扱い

本校の社会科は、中学1・2年はπ型で、地理・歴史を週2時間ずつで実施し、3年生で公民を週3時間で学習している。中学1年の地理は日本地理をおもに扱う。年間の学習は地図学習に始まり、沖縄、身のまわりの環境地図、水俣を扱ったあと、広島の学習となる。その後、阪神・淡路大震災、豊田、東北の原子力発電、北海道と続き、最後に東京の学習となる。

原爆は広島の部分で取り上げている。4時間構成となっており、以下に具体的にカリキュラムを紹介する。<1時間目>(広島とはどのような都市か)

原爆投下までの広島の歴史

- ①広島の地形
- ②城下町としての広島の発展
- ③明治期以降の軍都広島
- ④広島周辺の軍事施設

＊プリント資料・地図で見る広島の変遷

・原子爆弾被災状況地図

この時間では、原爆投下に至るまでの広島の歩みを紹介する。①まず、広島市の地形的な特徴として、河川が形成したデルタ（三角州）地形であることを確認する。デルタのため橋が重要であったり、川が交通の障害となっている点を確認する。②広島は毛利氏の城下町として発展しはじめ、江戸時代には浅野氏の居城として町が開発された。③明治期以降は軍都として成長したことを伝える。とくに、日清戦争時には、大陸への出兵が広島港（宇品港）から行われ、軍関係の施設が拡大していったことを指摘する。④第二次世界大戦時には、市内に陸軍の練兵場や工場があり、とくに広島城の周辺にあったことを地図で確認する。また、広島県には呉市に海軍工場があり、沖には江田島（海軍兵学校）、さらに東には大久野島（毒ガス製造の島）があったことも指摘する。この時間では、原爆投下までの広島の状況を確認する。

< 2時間目 > (科学的観測精神と原爆) [公開授業]

原爆のイメージと科学的観測精神

①原爆のイメージ

②映画「黒い雨」からイメージをつかむ

③北勲さんが観測した原爆

④科学的観測精神とは何か

＊映像資料 映画「黒い雨」自主撮影「北さんの証言」

＊プリント資料・『空白の天気図』柳田邦男 新潮文庫 『犠牲』柳田邦男 文藝春秋

この時間は、ノンフィクション作家柳田邦男氏が著した『空白の天気図』を素材として原爆を科学的に観測した事実に向ける。

①まず、原爆投下について知っていることをたずねる。小学校時代の経験から、フィルム映像を見たり、マンガ『はだしのゲン』を読んだ生徒もすくなくいる。

②具体的なイメージをもたせるために、今村昌平監督の映画『黒い雨』の冒頭10分くらいを見せて、投下前後の状況をとらえさせる。被害の状況は、次の時間の素材となる。

③一般的には、ピカッと光って、ドンと爆風が来たというイメージで語られる原爆投下だが、当時の広島地方気象台でこの場面を観察していた人がいることを紹介する。それを紹介した『空白の天気図』の部分を読出し、炸裂した瞬間の状況を想像させる。

ちなみにその部分を引用しておく。

「午前8時15分—

北が乱数の筆記のため視線をメモ用紙に伏せていたときだった。一瞬目も眩むような閃光を全身に感じた北は、ハッとして顔を上げ、視線を窓の外に向けた。すると市街地上空には驚くべき現象が起こっていた。白い朝顔の花のような巨大な光幕が、青い天空の中をサーッと超スピードで四方に広がって行くではないか。それは太陽が突然何千倍にもその輝きを増したのかと思われるような衝撃的明るさを持っていた。北がこの光幕を目撃した時間はほんの一瞬、おそらくは0.5秒程度にすぎなかったのだが、そのあまりの強烈さゆえに、彼は長い長い時間その光をみていたような錯覚にとらわれた。そして網膜に焼きついた光幕の映像は、彼にとって生涯忘れ得ぬものとなった。

これこそ、人類が自らの歴史の中に消すことのできない破壊と殺戮の深い傷跡を残した恐るべき瞬間だったのだが、そのときの北には、一体何が起こったのか毫も理解できなかった。

次の瞬間、北は、今度は至近距離でマグネシウムが大量に焚かれたような閃光と熱線の照射を顔面に受けた。

「熱いッ」

と、北は口の中で叫んだ。すぐ近くに新たな爆弾が落ちたと判断した北は、とっさに坐っていた椅子をはねのけて床上に伏せ、両手で耳と目を被った。

一秒、二秒と奇妙な静寂が過ぎ、心臓の鼓動が高鳴るのを感じた時、天地が裂けたかと思われる轟音と振動が響いて爆風が頭上を掠め、伏せた体の背面にばらばらと物が落ちてきた。」

さらに、報告者が実際に北さんからお話をうかがった時のビデオから、より詳しい当時の状況を視聴する。そして、時間、温度、色などに対して北さんが観測精神を発揮していることに気づく。

④人類史上初めての原爆が投下された瞬間を冷静に観察した北さんがもっていた科学的観測精神について考える。これは、柳田氏によれば、近代日本気象観測の父ともいわれる岡田武松が唱えたものである。「観測精神とは軍人精神とは違う。あくまでも科学者の精神である。自然現象は二度と繰り返されない。観測とは自然現象を正確に記録することである。同じことが二度と起こらない自然現象を欠測してはいけない。それではデータの価値が激減するからである。まして記録をごまかしたり、好い加減な記録をとったりすることは科学者として失格である。気象人は単なる技術屋ではない。地球物理学者としての自負心と責任とを持たな

ければならない。観測とは、強制されてやるものではなく、自分の全人格と全知識をこめて当たるものなのである。」(『空白の天気図』より)そして、この精神がどのように重要か、そして現在にどう活かすことができるかを考えてみる。具体的には、科学技術が発達した現在においても、さまざまな事実を科学的に観察・記録することが重要なことや、それに基づいて行動することが必要であることを確認する。柳田氏はそれを「科学知識による自己コントロール」と説明している。
 <3時間目>(原爆による被害)

原爆投下までの状況と被害について考える

- ①原爆開発の経緯
- ②なぜ原爆は投下されたのか
- ③原爆による被害の状況
- ④被爆者の状況

*プリント資料・原爆放射線の人体影響

この時間では、原爆投下までの経緯と被害の状況をとらえさせる。①では、原爆開発までの経緯をアジア・太平洋戦争の状況からとらえる。②実際に投下目標とされた都市や、その後の状況からアメリカの投下目的について考える。③具体的な被害状況を地図や資料から確認し、爆風、熱線、放射線による死者が出たことを確認する。また爆心地からの距離と死傷者数との関係についてもふれる。④では、戦後も続いた放射線による人体への影響について考え、被爆者の戦後についてとらえる。
 <4時間目>(ヒロシマと世界)

ヒロシマの原爆を世界はどう見ているか

- ①韓国のヒロシマ
- ②東南アジアの原爆観
- ③アメリカスミソニアン博物館展示
- ④世界遺産会議での原爆ドーム

*プリント資料・鈴木賢士『韓国のヒロシマ』高文研・朝日新聞(原爆神話冷静な検証を)・中国新聞(広島への誓いと対立)・毎日小学生新聞(日本・世界まるわかり)

この時間では、広島原爆が世界にどのような影響を与え、評価されているかについて考える。第二次世界大戦の被害と加害を考えるきっかけとしている。①では、韓国のハプチョンという町に被爆者が多く住ん

でいることを紹介し、その理由を考える。②シンガポールの戦争博物館で見た原爆の写真から、東南アジアの人々にとっての原爆が解放の意味を持つことに気づかせる。③アメリカでは、本土決戦での犠牲者を防いだ正義の爆弾として評価されていることを紹介し、被害者と加害者の受け止め方の違いを考える。④原爆ドームを世界遺産に登録する会議での米中の対応からも同様の視点が得られることをとらえる。最後に在外被爆者の問題や現在も続いている被爆認定の問題についてもふれ、この問題を風化させてはいけないことを強調する。

2.3 まとめと今後の課題

以上、現在の原爆を素材とした学習を紹介した。一部歴史や公民分野に関わる内容も含んでいるが、地域形成史をたどる上で総合的な観点は不可欠と考え、社会科の学習の一環としてとらえている。一方で、戦後の広島発展については時間の制約もあり、十分にふれることができず、今後課題を残している。

科学的観測精神については、SSHで今後生徒がふれる科学的な事象にどのように向き合うかを考える一つの事例としてとらえている。どのくらいの定着と効果があるかは検証していないが、事実のとらえ方は理科や数学の学習だけではなく、社会科学にも充分援用できるものであり、その重要性に気づくことをねらいとしている。後述するように、本校では来年度から広島における実習を企画しており、その際に中学校での学習がベースとなることを期待している。

【参考文献】

1. 大野 新「地理教育と平和・人権教育」日本地理教育学会編『地理教育用語技能事典』(2006)
2. 高嶋伸欣『『戦争・平和』をどう扱うか』星野・岩瀬・大野・小林・田代編(2004)『地理教育をつくる50のポイント』大月書店
3. 柳田邦男(1981)『空白の天気図』新潮文庫
4. 柳田邦男(1995)『犠牲』文藝春秋
5. 長岡 顯(1997)『『空白の天気図』と現地ゼミ』地理教育研究会編「地理教育」No. 26
6. 鈴木賢士(2000)『韓国のヒロシマ』高文研
7. 「米軍が空撮したヒロシマ・長崎」(2005)「地図中心」日本地図センター発行
8. 柴田 健(2007)『『現代世界と平和の学習』分科会のあゆみ』地理教育研究会編『地理教育』No. 36

3 高校で広島・長崎をどう学んでいくか

(丸浜 昭)

3.1 はじめに

私が担当をしている高校の日本史（2単位・必修）で、広島・長崎は必ず取り扱ってきたテーマである。しかし、限られた時間の中で、ここ数年は日本の加害の問題を扱う比重が大きくなり、広島・長崎に関してあまり新しいことには取り組めていなかった。

今年度、前記のように、SSHの研究に臨む社会科の課題として広島・長崎をひとつの柱としてとりあげることとなった。また、本校教育研究会の公開授業でも、直接的にSSHの研究ということではないが、その関わりを考慮して、広島・長崎を取り上げることとした。

本稿では、今年度の高校日本史でどのように広島・長崎を取り上げてきたかを中心に記したい。そして、あわせて、SSH研究をどう進めていくか考えてきたことにふれる。具体的には、授業を通してだけでなく、高校2年生で行っているゼミなどでどのように広島・長崎取り上げていけるかなどの検討である。

3.2 多様な取り上げ方ができる広島・長崎

「広島・長崎」をどのような視点から学んでいくことができるかを考えてみると、次のようなことが思いつく。

①総力戦、戦略爆撃の進展の一つの帰結として扱う。

第一次世界大戦における空襲、その後のゲルニカ、重慶爆撃、そして第二次世界大戦における都市空襲の展開の上に、広島・長崎があることをとらえる。

②核開発の歴史にふれ、広島・長崎は核時代の開幕であることをとらえる。

アメリカのマンハッタン計画など、どのように核兵器の研究が進められてきたかをみる。それを通して、核は通常爆弾とは原理が違い、その規模と被害は新しい時代を画するものであることをおさえる。第二次世界大戦後の核開発と核廃絶の課題を展望する。

③アメリカは、なぜ広島・長崎に原爆を投下したかを追う。

資料にもとづく「謎解き」の要素をいれて考えていく。冷戦の中での核大国アメリカの問題、その後の核開発競争の問題などを視野に入れる。

④ 原爆の被害をとらえる。

通常兵器との根本的な違いをふまえ、放射能による被害、戦後の被爆者の歩み、それに対する日本政府の

対応を視野に入れる。

⑤ 原爆はどう報道され、どう知らされてきたか。

投下直後の日本軍、戦争指導部の対応から、GHQによる規制、その中でのマスコミ報道などを扱う。これだけでも、教材化できる資料は少なくない。

⑥ アメリカで広島・長崎はどうとらえられてきたか。

投下直後の声明から、関係科学者の動き、投下の当否論争と「公式見解」の形成、スミソニアン博物館展示問題などを扱う。

⑦アジアがとらえる広島・長崎

とくに東南アジアの国では、広島・長崎で戦争が終わり解放されたという認識があり、教科書や戦争博物館の展示にもみられる。この認識が問いかけることや、広島・長崎との交流の結果などをあつかう。

⑧ 原爆の被害をふまえて、この戦争の中での日本の「被害」と「加害」を考える。

学校だけでなくマスコミなどの影響も大きいのだろうが、生徒の中には太平洋戦争という思い浮かぶのは原爆の被害という者が多い。その問題を考えながら、日本の加害の問題を見ていくことが大切であろう。

⑨ 原水爆禁止運動、核廃絶の運動を視野に入れる。

広島・長崎の原爆投下のあとアメリカの科学者からおこる核の世界的管理の提起もふくめ、その後の原水爆禁止運動を視野に入れて学ぶ。

こうして並べてみると、広島・長崎という問題は「学びの宝庫」であることに、あらためて気づかされる。どれも、具体的な事実をもとにじっくりと掘り下げ、視点を広げていくことができるテーマである。

もとより、普通の授業ではこれらをすべてあつかうことは出来ない。限られた時間の中で、どこに中心テーマを置き、どう教材を絞り込むかが、教科を担当する教員としての基本的な課題となる。私の場合、この絞り込みができず授業が不十分な取り組みになりがちである。今年度も、公開授業でありながら時間内でテーマを扱いきれず、生徒にも参加者にも申し訳ないことをしてしまった。

ただ、授業にどう臨むかだけでなく、今回、あらためて確認できたのは、広島・長崎は、生徒自身が関心を持って調べてレポートなどにまとめていく学習にふさわしいテーマだということである。高校生にも読めるような出版物などもけっこう出されている。ぜひ、この学びの宝庫に生徒が取り組む機会をつくっていきたいと思われた。

3.3 高校日本史における広島・長崎の実践から

この数年の高校日本史における広島・長崎の扱いは、次のようであった。広島・長崎自体の学習にあてられている時間は1時間である。

- ① 戦争指導部が国体護持を重視して本土決戦体制をとる中で、長い戦争の最後の半年におきた被害の一つとして扱う。
- ② 戦略爆撃の一つの帰結であったことにふれる。空襲を学ぶ中で映画『戦争—子どもたちの遺言』を見ていることが多い。
- ③ 詳しくはないが、「マンハッタン計画」による原爆の開発と、「なぜ広島に落とされたか」の経緯とアメリカでの論争に触れる。

今年度は、これまでの扱いに次のような点を加えて授業づくりをおこなった。当初の予定では2時間で、研究集会後の修正で結果的にはほぼ3時間をかけることとなった。

- ① 私自身の教材研究の意味も含めて、科学者がどうかかわってアメリカで核開発が進められてきたかにふれる。具体的には、マンハッタン計画の中でのシラードやオープンハイマーを取りあげる。
- ② 広島・長崎へ投下される状況をとらえる。その際、史上はじめての実戦への原爆投下を科学者の視点からも考えられるようにしたい。
- ③ 核兵器とはどのようなものか、どのような被害をもたらすのかの実相を「わかっているだろう」ですまさずにしっかりと見るようにする。
- ④ 上記で見る広島・長崎への原爆投下の実相がアメリカではどう扱われてきたかを追う。公式見解からスミソニアン博物館展示問題までふれる。
- ⑤ アメリカで原爆の実相が知られていないことを日本の立場どうとらえるか考える。日本の加害の問題をみることにつなげる。

全体を通して重視をしたいと考えたことのひとつは、核兵器とはどのようなもので、どのような被害をもたらすのかの実相をきちんと見たいということである。この実相をしっかりとみたいということは、この数年、日本の「加害」を扱うときにも重視してきた。数年前まで、本校の生徒は社会科でも様々な機会に戦争のことを学んでいるので、それなりにわかっているだろうとして進めてきた面があった。しかし、必ずしもそうではないことをこの数年強く感じてきた。そして、戦争をとらえるにしても、戦後をとらえるにしても、やはり生徒の心の中に残るような「実相」をふまえることが大きな基盤になるのではないかと思えて、この数

年は視聴覚教材などをより重視してきた。今回も、この延長線上で考えてみた。

こうした視点から、実際の授業の概略は次のようになった。各時間で扱ったプリントに載せた問いかけと、史料をどのように扱ったかを簡単に示しておく。

< 1時間目 >

原爆の開発と日本への投下をめぐって

- ① 原爆はどのように開発されてきたか
 - ② 科学者の関わり方から
 - ③ 最初の核実験
 - ④ 日本への投下はどう決められたか
 - ・ 日本を降伏させるために原爆投下が必要だったのか
 - ・ アメリカが日本へ原爆を投下した要因は？
- * 最初の原爆実験と広島に投下の映像を視聴

①は、年表（掲載略）と史料A（32ページ）の地図を使って、マンハッタン計画を概観した。

②は、史料A<a>の一部を使い、科学者と原爆開発をめぐってどのような課題が生まれていたかを少し紹介するにとどめた。授業で扱うより、生徒自身に調べさせてみたいことである。調べてみないかと呼びかけたが、残念ながら、今年度はレポートを出す生徒はいなかった。

③は、史料A<c>とアラモゴードにおける最初の原爆実験の映像を見た。これから1か月も立たずに広島・長崎で実際に原爆が使われることを、この実験に立ち会った科学者はどう考えるか、②の問題にも立ち返って問いかけをした。

④は、史料B（33ページ）を使ってどのような問題が指摘できるのかの確認をした。そして、最後にテニアン基地で準備を進めて広島での原爆投下に至るまでの記録映像を視聴した。

< 2時間目 >

原爆はアメリカではどうとらえられてきたか

- ① 原爆とはどういう爆弾だったのか
 - * 広島投下原爆の被害の特徴を映像で視聴
- ② アメリカでは原爆はどう伝えられてきたか
 - (1) 大統領声明とペンタゴンから公式見解
 - (2) 公式見解のほころびと当局の対応
 - (3) 「ヒロシマ論議」と公式見解の再主張
 - ・ 背後で何が進められていたか
- ③ スミソニアン博物館の展示をめぐって
 - ★ アメリカのこうした動向から何を考えるか

①では、通常兵器とはどこが違うかを問いながら、映像を使って、1) 熱風、2) 爆風、3) 放射線の被害を確認した。核兵器誕生は、現在にもつながるまさに時代を画する出来事であったことをとらえたい。

②は、史料C・D (34、5 ページ) をプリントにそって読み取り、まとめた。ここでは、日本への原爆投下を正当化するアメリカの「公式見解」がどのように生まれたのかを確認することが中心課題である。研究集会の公開授業の際は生徒に読ませ板書をしていったが、これにかなり時間をとられた。研究集会後、結局、読み取りをまとめたプリントを配布して確認をすることとなった。

③は、史料E (36 ページ) でスミソニアン博物館の展示問題をみた。はじめに企画された意図や展示内容を見ると、アメリカでも研究の進展で、日本への原爆投下がどのような問題をもっていたのかは明らかにされている。また、日本の協力の下で、被爆者の写真や体験談を含めた原爆被害の実相が示されようとしていた。こうした機会が、退役軍人の批判などでつぶされたのである。研究授業では、この部分の確認が中途半端で終わってしまい、その後につなげる生徒への問題提起もできなかった。結局、それはこのあとの時間で次のように補うこととなった。

< 3時間目 >

原爆に対するアジアからのまなざし

①シンガポールでの原爆投下のとらえ方

②このとらえ方を、何が、どう変化させるか

③日本に問われることは…

* 日米英開戦後、中国での戦争はどうなっていたのか

①と②は、史料Fa (37 ページ) を使った。実は、当初の計画では予定をしていなかった史料だが、1時間増やしたこともあり組み込むこととした。この中で、陸培春氏にしても鄭来氏にしても、被爆者の体験を聞いたり原爆資料館の展示を見るなど、被害の実相に触れることで原爆のとらえ方が変化していくことに注目した。

③は、史料Fbcを使い、アメリカで原爆被害の実相が知られずに日本との戦争が語られることと対比して、日本では、「三光作戦」のことがほとんど知られずに中国との戦争が語られていること取り上げた。いきなり中国のことを扱うのはやや唐突な感があるだろうが、1941年のいわゆる「太平洋戦争」が開戦したあと中国との戦争はどうなっていたのかという問題とあわ

せて、簡単に触れたものである。

以上が、研究集会をはさんでの今年度の広島・長崎に関わる授業概要である。

3. 4 授業の反省と課題

公開授業に際し、1時間の授業で扱う史料の精選と時間配分など、授業づくりの基本的な点でずさんであったことを、申し訳なくかつ恥ずかしく思っているが、ここではこれ以上ふれないことにする。

「スミソニアン論争」をどうとらえるか生徒の意見を聞きたいと思っていたが、あまり引き出すことができなかった。ただ、「アメリカで原爆のことがあまり知られていないのは困ったことだ」というような考えに対し、「勝った国がそうなるのはある意味では当然なのではないか」という意見が出された。こうした声をもっと引き出せるようにし、その上でどういう授業をつくっていくかが課題となるような授業づくりをめざしてみたいと思う。

また、原爆の被害をどう取り上げるかを考えると、被爆者の戦後の歩みと政府がどう対応してきたかという事実をきちんと取り上げることが重要だと思える。それは、日本政府が原爆をどうとらえ、核廃絶という課題に実際にどう臨んでいるのか、という現代の問題につながるからである。戦後史とも関わるが、限られた時間の中で何を扱うのか、検討が必要である。

原爆に限らず、映像を使って被害や加害の実相をつかむことを重視した授業に対して意見を求めるアンケートを行った。声を寄せてくれた者は多くはないが、その中ではこうした授業は好評だった。年賀状で、ぜひ今後も続けて欲しいと書いてきた生徒もいる。この声は、受けとめていきたい。

3. 5 SSHの研究課題をどう薦めていくか

SSHの取り組みとして、社会科では、これまで「科学者の社会的責任」をテーマとして掲げ、各教科の授業でふれることと、このテーマにふさわしい講師を招いてさまざまな角度からの講演を受けることを中心にしてきた。3人の講演記録をまとめた冊子を作成し、これまでの成果の継承もはかってきた。

今年度から掲げた「『科学者の社会的責任を考える』授業を作るー広島をどうとらえ、どう教えていくかー」という課題を受け、社会科のこれまでの取り組みをさらに進めていくことを検討したい。上記の冊子の常石敬一氏の731部隊に関する論文を読んだ生徒が、次のような感想を書いた。

「常石さんはこの講演の中で、人体実験のために健康な人間を選び出すことを「茶番」だとおっしゃっていた。私はこのことを授業で学んだときに「なるほど」と納得をしてしまったため、こうおっしゃっていたのは少し意外だった。しかし、常石さんは「これをきいて、『なるほど立派なもんだな』と思う人と、『なんかおかしいんじゃないか』と思う人と、いるだろうと思います」とおっしゃっており、どうやら私たちが持つ印象というのは2通りに分かれるようである。常石さんは講演の中ではおっしゃってはいないが、この印象の違いというのは私たちが感情移入した立場の違いによって生まれるのではないだろうか。つまり、加害者と被害者のどちらに感情移入したかによって印象が変わってきたのである。私は加害者、今回の場合でいうと研究者の立場からこの事実を捉えたため、納得してしまった。それに対して、常石さんは被害者、今回でいうといわゆる丸太の立場から捉えたために茶番だと感じたのだ。ただ、このように考えてみると私は加害者に感情移入していることになる。今まで、とくに戦争に関係する話では被害者の立場から考えてきたことが多かったために、自分が加害者の視点から見ていたことが意外だった。」

ここでは731部隊の問題だが、科学者が抱えた課題が人ごとではなく、自分に引き寄せて深く考察されている。おそらく、将来は理系の進路を考えている生徒なのだろう。あたらしいSSHの取り組みとしてめざしたいことは、こうした問題意識を持つ生徒とともに、教科の授業を通してだけでなく、何らかの場で生徒自身の調査研究を進めさせ、学びあい・教えあいの場もつくって取り組むことである。

その一つとして、高校2年の総合学習として実施している少人数のゼミで、「科学と戦争」というようなテーマのものを解説することを検討している。広島・長崎の問題はさまざまな視覚からの多様な学び方ができ、あらためて生徒自身が調査研究をするのにふさわしい。あわせて、これまであつかってきた731部隊の問題、ナチズムと医学なども視野にいれたものとしようと考えている。そして、文献による学習だけでなく、可能であれば、フィールドワークや研究者を訪ねる企画も検討してみたい。

【参考文献】

- ・西島有厚『原爆はなぜ投下されたか』青木文庫 1971
- ・荒井信一『原爆投下への道』東大出版会 1985
- ・伏見康治・論訳『シラードの証言』みすず書房 1982

- ・中沢志保『オープンハイマー』中公新書 1995
- ・子どもたちに世界に！被爆の記録を贈る会編『原子爆弾の記録』三省堂 1980
- ・G ミッチェル他『アメリカの中のヒロシマ・上下』岩波書店 1995
- ・フィリップ・ノビーレ『葬られた原爆展』五月書房 1995
- ・油井大三郎『日米戦争観の相克』岩波書店 1995
- ・笹本征男『米軍占領下の原爆調査』新幹社 1995
- ・NHK出版『ヒロシマはどう報道されたか—NHKと中国新聞の原爆報道』NHK出版 2003
- ・陸培春『もっと知ろう東南アジア』岩波ジュニア新書 1995
- ・歴史教育者協議会『ちゃんと知りたい日本の戦争ハンドブック』大月書店 2006

4 教育研究会における授業検討

これまで述べた2つの実践は、2007年11月に開催された本校教育研究会において報告した。この実践に関する研究協議会の内容は以下のようなものであった。なお、助言および講演者として、浅井基文氏(広島市立大学広島平和研究所所長)に来ていただくことができた。(以下は本校教育研究会報告書より引用)

4.1 公開授業をめぐる討議

(司会)：本校はスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受けており、社会でも「科学者の社会的責任」をテーマに掲げて講演会の企画などに取り組んできた。本日の授業はSSHの取り組みも視野に入れたものであった。それではまず、中学の授業を行った大野から、授業のねらいなどを話してもらいたい。

大野(中学授業担当者)：自分は広島出身なので広島を取り上げることはかねてから意図していた。94年に北勲さんにお会いしてインタビューを行った。それをもとに「空白の天気図」の授業化を構想した。今回の授業はすでに実践してきているので、基本的にできあがった形のものであるが、それを見ていただきみなさんからのご意見を伺い再考したいと考えた。授業のポイントの一つは、小学校時代の原爆に対するイメージを深めることにある。その上で、原爆を観察・観測していたという事実から何を問いかけるかをねらってきた。SSHということもあり、科学的とはなにかということも意識させたいと思った。科

学的観測精神を日常の生活にも結びつけてほしいというのが結びであった。但し、生徒が年々幼くなってきているなかでやや難しいかなとも感じた。

司会：次に高校の授業について。

丸浜（高校授業担当者）：今まで広島・長崎だけでテーマを立てたことはなかった。十五年戦争を扱う中で、加害の事実を中心に取上げてきたが、その通史の中に広島・長崎を位置づけたいと考えて取り組んでみた。今回の授業の前段として、前時には核開発の中での科学者の問題を考えた。今日は、スミソニアンの問題まで触れて、アメリカで核を論議するときに、広島・長崎を知って論議するのと知らないで論議するのでは違うのではないかということ提起してみたかった。これはアメリカが広島・長崎を知らないのはひどいという問題ではなく、日本自体が核をどう捉えるかという問題であり、日本が中国との戦争をどのように捉えているかという問題にも繋がってくる。次の時間では、中国との戦争の事実をしらないというのは、アメリカが原爆を知らないのと同じではないかということを考えていきたい。

司会：それでは授業についてのご意見、ご質問を頂きたい。

A：カリキュラムを見ると中学で日本史・世界史を一通り行っているようだが、本日の授業はおおよその通史を理解していることを前提にしていると考えてよいのか。

丸浜：必ずしもそうではない。高1で世界史を学んでおり、第1次世界大戦あたりまでやっているのだから、それを受けて、世界と日本を結びつけながら、第一次世界大戦以降を扱ってきている。

B：大野先生の授業の観測精神というのはその人本人の中にある問題、一方、丸浜先生の核の被害という事実とどう向き合うのかというのは、個人というより社会全体の問題だと思う。大野先生は、本人の精神の問題を社会全体の問題にどのように繋げていくのか。

大野：ある意味で北さんは特別な存在なので、北さんになることはできない。そこで、北さんの精神をどう生かすかを考えなくてはならない。21世紀に生きるものがどう受けとめるかをテーマにしている。反核運動や原爆の社会的意味など本来の原爆や広島の問題とは少しはずれているかもしれないが、これだけを切り取ってその中で消化させることを考えている。

C：大野先生の授業はメッセージ性が強くわかりやす

かった。観測精神の重要性が中学1年生にストレートに伝わったと思う。SSHということでは科学者の過信を考えるべきだと思う。中学生は相対化してもの考えるのは難しいので、一つの考え方を作ってあげる。その上で高校生では他の側面を考えるようにすべきだと思っている。例えば、高校生に対しては、北さんの体感 800℃は本当なのか、科学的事実と言えるのかといった検討が必要だろうと考えた。

大野：その通りだと思う。北さんの言葉の中身を精査していくことが必要。中学生の場合にはまず受けとめて、それが生活の中でどのように生かせるかを考えてほしいと思っている。高校生の場合には、被害の状況などももっと緻密に考えていく必要がある。例えば、被害の状況をデジタル化して地図に落とししていくといったことも可能である。原爆というのは終わった問題ではなく、むしろ今色々なことが判明してきており、高校で考える素材もたくさん出てきている。

D：大野先生は岡田武松の観測精神が軍事精神に利用されてしまったことについてどうお考えか伺いたい。また、丸浜先生の授業で扱われたスミソニアンのような問題は日本にもある。アジア太平洋戦争をどのように認識し、どのように展示に反映させるかということはある。今日の授業では何をメッセージとして一番伝えたかったのか伺いたい。

大野：科学者の科学的精神が軍によってゆがめられていったという事実は生徒に伝えていくべきだと考えている。

丸浜：時間が足りず、十分に伝わらず申しわけなかった。原爆について映像等を、生徒はなにがしかは見たことがあるという。悲惨な現実も含めて見ることが戦争認識の土台と考えている。核の持つ問題を認識するときに現実に広島・長崎で起こった事実を見る、直面することの意味を考えたいというのが土台にある。アメリカでは広島・長崎の事実を見る機会が失われ、その上に今のアメリカの核政策があるということを見て、そこで日本では何を受けとめればよいのかということを生徒に問い返してみたいと考えた。三光作戦についての中国と日本の関係はどうなっているのかということに繋げてみたいという意図であった。

司会：広島市立大学広島平和研究所の浅井基文先生においで頂いているので、前半のまとめを兼ねて授業についての感想をお願いします。

浅井（助言者）：中学・高校の授業を直接見たのは今回

が初めてであり新鮮であった。特に、地理で広島を取り上げ、しかも視測精神というところに結びつける切り口は印象が強く残った。日本史は自分の考える対象としていることと重なる。AとBとに切り分けて分析するという手法は面白いと思った。正直なところを言うと、中学生の反応のほうが高校生の反応よりも率直であり受容度が高いという印象を受けた。中高一貫ということを考えて、中学のときのフレッシュな受容性・感受性が高校で強まっていくというような授業だとよいのではないかと感じた。広島に移る前に大学で教えていたときに、現代史についての知識が圧倒的に欠落している学生がとても多かった。今日のような授業を行っている学校があるということは新しい発見であった。優れた子どもたちが入ってきている学校だと思うので、そのような子にエリート意識を養うのではなく、日本の過去のゆがんだ部分を明確に伝えていただきたいと強く思った。

4. 2 「核時代の平和教育のあり方」について

司会：それでは公開授業に関する協議に続いて、浅井基文先生に「核時代の平和教育のあり方」というテーマでお話しいたします。

①「核時代」をどう捉えるか

広島を知らずして平和教育はないと思い広島に移ったが、現実の広島は弱まり、「疲れている」(舟橋喜恵広島大学名誉教授の形容)。文科省にとって広島は反動の西の拠点となり平和教育が困難となっている。そこでなぜ広島がこうなったか考えなくてはいけない。

もともと広島にも「良い核」と「悪い核」という捉え方があった。50年代にアメリカがバラ色の原子力という宣伝をし、日本もその影響を強く受けた。原子力の平和利用に期待が寄せられた。峠三吉の詩や平和宣言にさえも、「良い核＝原子力の平和利用」の期待がみられた。

しかし、本当にこのような捉え方でよいのか。核の肯定面の代表として原子力発電がある。しかし、原子力発電の安全神話はすでに崩壊しつつある。核燃料サイクルの最終処分は本当に可能なかという問題が出てきて、西欧では脱原発の流れがでてきている。

私たちが考えるべきは、「核廃絶」か「核兵器廃絶」かという大きな問題。医療や農業など限定的な部分で放射線の利用はあり得るが、原子力発電が肯定できるのか私は懐疑的になっている。核廃絶か核兵器廃絶かは、21世紀の大きな課題となっている。非同盟諸国では原子力の平和利用は無条件で肯定されるべきとの立

場をとっているし、イランの問題もこれに関わっているが、「核時代」を無条件に肯定してよいのか。子どもたちがどのように考えるように導くか、子どもたちにどのように伝えるかは大きな課題である。

②平和教育の歩み

そのような前提で平和教育の歩みを見てみる。占領期、50年代、60年代、80年代、90年代と波がある。50年代に平和教育が発出するが、欠陥が多く平和教育の失敗であったと当事者たちも振り返っている。60年代に入ると指導要領の改定もあり、平和教育が失速させられる。これに危機感を持った石田明氏など被曝教師が中心となって平和教育を再興し、体系的な平和教育が実践される。80年代に再び失速させられる。原因は三つあった。一つめは被曝教師の退職、二つめは日教組の分裂、三つめは文部省(当時)の平和教育に対する締め付けが厳しくなったことがあげられる。それが今も続いている。広島でも広島市の小中高校や私立以外ではほとんど平和教育が行えなくなっている。このように平和教育には大きな波があり、全体としては抑えつけられる方向で進んできた。

③平和教育にとっての課題

日本では、「平和教育＝原爆教育」として行われてきた。しかし、広島と長崎に視点を限った平和教育では不十分だと考える。平和というと戦争のアンチテーゼとして出てくる。そこで憲法9条の問題が取り上げられる。しかし、そもそも平和がなぜ大事かをもっと考えるべきである。人権・民主にもっと目を向けなければならない。この根底にあるのは人間の尊厳であり、これを承認するか否かが問われている。憲法「改正」の一つの重要な争点は二つの国家観の対決である。人間の尊厳を大切にすれば、国家が個人の上に君臨することは許されないはず。このようなことを踏まえた上で私たちはどのような平和を展望するのか。「力による平和観」と「力によらない平和観」という二つの平和観がある。21世紀はどちらを選択すべきなのかという観点から考えなくてはいけない。残念ながら、アメリカを中心に「力による平和観」を打ち出しているものがあるが、その対抗軸となるのが憲法9条の「力によらない平和観」である。

同時に、人間の尊厳を重視する立場から新自由主義と対決しなくてはならない。日本では歴史の流れであるとあきらめムードもあるが、国際的に見た場合には新自由主義が勝利をおさめたとは言えない。北欧諸国やドイツなど明らかに新自由主義とは異なった方向の流れがある。新自由主義は市場や利潤に最高価値を置

くという点において、人間の尊厳に矛盾するものである。こういうものと対峙する観点を取り入れる必要がある。これを21世紀への平和教育への展望とうことで考えなくてはいけない。

以上のまとめとしては、まず「核時代」というものの見直しが必要。21世紀は「脱核時代」になるべきと思っている。人間の尊厳、人権・民主こういったものを平和教育の根本に据えるという発想が必要ではないか。先程の議論に相対化の問題が出されていたが、普遍的な価値までも相対化してはならないと考える。普遍的なものは、物事の価値判断の基準としてしっかり教育しなくてはならない。人間の尊厳、人権・民主というものの価値、その普遍性を根底に置いた教育が必要。そこまでも相対化しては、子どもたちに何を教えるのか、何を伝えるのか確信を持たなくなる。そのような点で、今の支配的な内外の状況は必ず崩れると確信している。

最後に石田明氏のメッセージをあげておきたい。「さまざまな芸術文化活動を活発にして、命の尊厳や平和の尊さを人びとの感性に訴えていくことが重要だ。」これが、まさに命の尊厳、人間の尊厳ということになり、平和は「力によらない平和観」ということになる。

平和教育を広島・長崎に限ることは、21世紀の平和教育としては視野を狭めてしまう可能性がある。核は重要な問題ではあるが、もっと根本に遡って人間の尊厳を直視し、人間の平和なあり方は何かと考えた場合にそれは核問題に限定されるべきではないと私は今の段階で考えている。

(質疑応答略)

5 SSH広島実習にむけて

冒頭でも述べたように、本校では来年度のSSH事業として、広島における実習を企図している。その準備として、2007年8月に、社会科教員3名で広島を訪問した。

日程は、8月6日～8日(2泊3日)で、吉田俊弘・丸浜 昭・大野 新の3名が参加した。スケジュールは、8月7日 午前 平和記念資料館見学、午後 広島市立大学 広島平和研究所所長 浅井基文氏への依頼および取材、夕方 中国書店 竹崎嘉彦氏への依頼および取材

8月8日 午前 広島気象館(旧広島地方气象台)見学、午後 広島郷土資料館見学である。

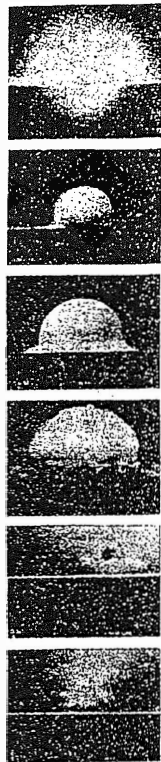
2日間の調査の結果、来年の実習実施の見通しがた

った。2泊3日の日程で、具体的には生徒6～7人を連れ、広島原爆の日直後の広島を訪れ、資料館、平和研究所、気象館などを訪問する。その中には、被爆者からの聞き取りも含む。また、GISを利用した平和地図づくりにも取り組む予定である。

下見でお世話になった浅井基文氏には、その後の研究会の折りに助言と講演をお願いした。

また、来年度への布石として、年度末の3月13日には、水本和実氏(広島市立大学 広島平和研究所准教授)に、「広島から核問題を考える」と題して、講演をお願いしている。

実習の内容および、講演などについては、今後の論集で報告する予定である。



『ヒロシマを壊滅させた男オッペンハイマー』

P.グッドチャイルド 白水社

オットー・フリッシュはその時の光景をこう語る――

するとその時、音もなく太陽が輝いた。つまりそう見えたのだ。沙塵のはしにある砂粒がおそろしく明るい光に揺らぐ。色も形も見えない。光は二、三秒間変わらず、それから徐々に明るさを減じていった。私は振り返りてみたが、その地上の小さな太陽はまだ明るすぎて、とてもまともに見ることはできなかった。それでも目は大きくなり、少しづつ光が弱くなり、巨大な油田の炎のようになり、いったい、形はどうか薄らに似ていた。それからゆっくり空に上がってゆき、地上との間は埃の渦が舞うようにひびて、妙な連想だが、真つ赤に燃けた葉が舞って落ちてくるように見えた。それから、熱いガスが舞って少しく冷えて赤味が徐々に薄れるにつれて、その周りに白い光が現われてきた。電離した空気が発光している……恩をむ光景だった。原爆を見た者は、けっしてこの光景を

忘れないうらう。完全な静寂がずっと続いた後に爆発音がきた。耳をしっかりと叩いていたのに、ものすごい音で、そのあとでも遠くをたたく車の音が往来しているような音が長いこと続いた。今でも耳に残っている。

「朝が来たようだった。フィル・モリソンはゼロ地点から十マイル離れた地点にいた。まだ夜中なのに、沙塵の太陽の熱がいきなり肌を焼くんだ。」
S・C・Cの陣地の内部にいた人々は、爆発の方向の反対側に開けられた掩壕の開口部から、目もくらむような光を見た。数秒間の静寂のあと、嵐のようなとよめきが起きた。
「あるものは泣き、ほとんどの者は無言だった」とオッペンハイマーは語った。「その時、私の心をバグワード・キーターの一篇、クリン・ナガが自分の本務を果たすまでと王子に説いたときの「節がとぎやう」がよみがえり、多くの世界の破壊者なり」
人々の祝福の言葉を浴びながら、彼は力強く舞い上がる火の球を見ようとする掩壕の外に出た。

シラーは、ドイツの核開発の可能性を認識し、アメリカに核開発を促した最初の人物であった。また、核開発に対する疑問を表明したおそろしく最初の科学者もあった。ドイツの敗北が明らかになる頃、彼の関心ももっぱら原爆計画を執行する目的は何かという点に向けられたのである。原爆の開発そのものを問うシラーのこの姿勢は注目すべきものである。オッペンハイマーの有力な科学者や政府内のいかなるメンバーも、公式に「オッペンハイマー」は「オッペンハイマー」に宛てた手紙の中で、核開発に対する疑問を打ち明けていたが、公には表明していない。このような姿勢を示すことはなかったからである。
シラーは、アインシュタインの紹介を利用して大統領に通告するという形で、再び行動を開始した。ルーズベルト・シラー会談は一九四五年五月八日に予定されていたが、大統領の死（同年四月十二日）によって実現は不可能なものとなった。シラーはそこで、新任のトルーマン大統領に接近し、彼の代理で後に國務長官に就任したハインズ宅に、先のアインシュタインの紹介状とシラー自身の覚え書きを持ちこんだ。同年五月八日。
しかし、サウス・カロライナ州スパータンバーグのバーンズ宅で行われたシラー・バーンズ会談は、結局失敗に終わった。バーンズがシラーの遺言にまっとうな耳を貸さなかったのである。バーンズは、シラーの話の内容もさることながら、彼の行動を自己責任で否定したのである。「シラーの政策立案に開きしよう」という欲論は、私によい印象を与えなかった」とバーンズが回想するように、彼は科学者の政治参加そのものを持まなかったのである。加えて、後には戦時時代の國務長官として、原爆を対外政策を有利に導くための政治手段として利用する、いわゆる「原爆外交」を実施したバーンズと、「原爆の存在は合衆国の強力な地位の終焉を意味する」と主張するシラーとの間に、いかなる接点も存在しなかったのである。



科学者たちの抵抗の結果、妥協案が作られた。それはロスアラモスにおける仕事を二段階に分け、原子力兵隊開発研究段階は文民管理に、開発された兵器を生産する最終過程は軍部管理の下に置く、というのであった。第二段階にうつる時期は、一九四四年一月以降のある時期とされた。妥協案で反対論者たちは納得し、計画に協力することになった。しかし、この妥協案は、要するに軍部管理への移行を疑はしにすぎず、軍部管理そのものを否定したわけではないのである。軍部が、このように軍部保持上の理由から軍部管理に回帰したのはなぜであるか。科学者たちはドイツの原爆開発に対抗するため原爆の早期開発を無視し、そのため大幅な研究活動の自由を認めようとした。そのための研究の独立と自由な科学者間の研究交流を大幅に要求したが、軍部には別の国際政治観があった。

【二】原爆投下によらない日本の降伏についての
アメリカの見解

(一) 陸軍航空隊司令官アール・ドブリンの見解(一九四五年七月)
「日本は爆弾と海上封鎖によって、すでに降参すべき状態にある。日本上陸作戦の必要はない。日本人は既に降参準備を失ってしまったのだから、到底なぐはは持ち耐えられない。」
ラルフ・バーンズ(参謀総長)の見解(一九四五年六月廿七日)
「……この期間、本官は日本政府が降参のきっかけをつかむため向うから降参を求めていることを確信するにいたった……(日本)ソ連の態度を告げ、われわれに降参使用計画があることに同意して降参の準備をさせる。もちろん無条件降参後の天皇、および日本の命運について大統領の意のあることを伝える。それは日本の降参を促す機会をあたえることには十分足りるものと本官は考える。このような手段をとって、われわれとしては失う所はないと思ふ。」

(二) 原爆投下が和平派と主戦派に与えた影響
① 原爆投下が和平派と主戦派に与えた影響
② 第二次大戦中の米ソ関係についての資料
③ ルースベルト大統領のソ連に対する態度、國務次官サマエリウエルの証言
④ 九月の米ソ同盟の崩壊
⑤ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
⑥ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
⑦ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

(三) 原爆投下によらない日本の降伏についての
アメリカの見解
① 八月九日、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
② 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
③ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

(四) ソ連参戦が和平派と主戦派に与えた影響
① 八月九日、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
② 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
③ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

(五) 原爆投下が和平派と主戦派に与えた影響
① 原爆投下が和平派と主戦派に与えた影響
② 第二次大戦中の米ソ関係についての資料
③ ルースベルト大統領のソ連に対する態度、國務次官サマエリウエルの証言
④ 九月の米ソ同盟の崩壊
⑤ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
⑥ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

(六) 米ソ関係の転機(冷たい戦争のはじまり)
① ルースベルトの死とドイツ降参の接近
② 八月九日、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
③ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

(七) 原爆投下によらない日本の降伏についての
アメリカの見解
① 八月九日、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
② 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
③ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

『原爆投下への道』
荒井信一 東大出版会

(一) 原爆投下が和平派と主戦派に与えた影響
① 原爆投下が和平派と主戦派に与えた影響
② 第二次大戦中の米ソ関係についての資料
③ ルースベルト大統領のソ連に対する態度、國務次官サマエリウエルの証言
④ 九月の米ソ同盟の崩壊
⑤ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
⑥ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

(二) 原爆投下が和平派と主戦派に与えた影響
① 原爆投下が和平派と主戦派に与えた影響
② 第二次大戦中の米ソ関係についての資料
③ ルースベルト大統領のソ連に対する態度、國務次官サマエリウエルの証言
④ 九月の米ソ同盟の崩壊
⑤ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
⑥ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

(三) 原爆投下によらない日本の降伏についての
アメリカの見解
① 八月九日、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
② 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
③ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

(四) ソ連参戦が和平派と主戦派に与えた影響
① 八月九日、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
② 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
③ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

(五) 原爆投下が和平派と主戦派に与えた影響
① 原爆投下が和平派と主戦派に与えた影響
② 第二次大戦中の米ソ関係についての資料
③ ルースベルト大統領のソ連に対する態度、國務次官サマエリウエルの証言
④ 九月の米ソ同盟の崩壊
⑤ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
⑥ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

(六) 米ソ関係の転機(冷たい戦争のはじまり)
① ルースベルトの死とドイツ降参の接近
② 八月九日、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
③ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

(七) 原爆投下によらない日本の降伏についての
アメリカの見解
① 八月九日、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
② 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
③ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

西島有厚「原爆投下の意味」
歴教協『歴史地理教育』1996.10

(一) 原爆投下が和平派と主戦派に与えた影響
① 原爆投下が和平派と主戦派に与えた影響
② 第二次大戦中の米ソ関係についての資料
③ ルースベルト大統領のソ連に対する態度、國務次官サマエリウエルの証言
④ 九月の米ソ同盟の崩壊
⑤ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
⑥ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

(二) 原爆投下が和平派と主戦派に与えた影響
① 原爆投下が和平派と主戦派に与えた影響
② 第二次大戦中の米ソ関係についての資料
③ ルースベルト大統領のソ連に対する態度、國務次官サマエリウエルの証言
④ 九月の米ソ同盟の崩壊
⑤ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
⑥ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

(三) 原爆投下によらない日本の降伏についての
アメリカの見解
① 八月九日、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
② 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
③ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

(四) ソ連参戦が和平派と主戦派に与えた影響
① 八月九日、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
② 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
③ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

(五) 原爆投下が和平派と主戦派に与えた影響
① 原爆投下が和平派と主戦派に与えた影響
② 第二次大戦中の米ソ関係についての資料
③ ルースベルト大統領のソ連に対する態度、國務次官サマエリウエルの証言
④ 九月の米ソ同盟の崩壊
⑤ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
⑥ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

(六) 米ソ関係の転機(冷たい戦争のはじまり)
① ルースベルトの死とドイツ降参の接近
② 八月九日、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
③ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

(七) 原爆投下によらない日本の降伏についての
アメリカの見解
① 八月九日、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
② 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)
③ 八月九日午後、ソ連軍が満州に侵入したとき、余は我と我が身に降りかかった。……(ルースベルトの証言)

史料 B

<a>

最初から、原爆の目に見える記録は構造物への影響に限られ、人間への影響は避けるか、無視されていた。ヒロシマ後の数週間、マッカーサーの日本上陸前、利用可能な唯一の写真はキノコ雲だった。それは恐ろしいが、地上にいる人間に開くものからは切り離されている。八月末、米軍機が広島や長崎上空を低空飛行した時、焼夷弾の最初の写真が現われた。荒涼として、コンクリートの建物はわずかに残る、焼け焦げた木が、平らな、不気味で恐ろしい、人通りのない光景に、点打つように立っていた。

それでも、こうした写真は想像を正しく伝えるものとは言い難い。どの写真も全体の破壊状況ではなく、ある特定部分に限定されている。新聞や雑誌は焼夷で焼き払われた東京の一番の同じような光景を掲載していた。広島はほとんどすべてが破壊されたのに、東京は大部分の建物が残っていることを知るすべしがない。ニューヨーク、ワシントン、ワシントン紙が広島と東京の写真を隣り合わせに載せた時、広島が細かく砕かれていることを除いて、両者の区別が困難だった。

数日後、新聞や雑誌は地上で撮影された最初の写真を掲載した。その中にいる人間は、瓦礫の中を歩く荒涼とした道を歩く人―死者ではなく、生きていくとの証しだった。ライフ誌は既述になった工場、わじわじわと電柱、一層風のきまぐれで市内を吹き飛ばされた市バスの骨格といった写真を載せた。ヘンリー・ルイスは、日増しに技術が進々、複雑化する世界の中で、「写真の威力」を「出来事を把握し、感情を凝縮し、驚き、感動し、導き、時には嫌悪させる」能力だと述べている。だが、ライフ誌の広島の写真はこのどれについても、完全には成功していない。イメージは人間大だが、人間に対する破壊の証を欠いている。ライフ誌の説明では、広島は単に、「今なお、悪臭のただよる瓦礫の山」である。写真には一人の負傷者も登場せず、病人やけが人を治療する医師や看護婦の姿もなく、火葬場のマキもなく、悲嘆にくれる人もいない。写真の中に表現される物理的な被害も、そのすさまじさを十分示すものではなかった。学校や病院、住宅は含まれていない。

トルーマン大統領が、原爆の人間への影響を見ることを妨害された。陸軍航空部隊司令官であるハッパ・アーノルドは大統領に、原爆投下を受けた都市の写真アルバムを送った。トルーマンはアーノルドに、個人に感銘を伝えている。しかし、写真の大部分は航空写真だった。地上から撮影された写真は四枚しかない。この中に互換性を歩き、ひとひげがをしたように見える人はいない。実際、投下の結果が人間の表情に見られるようなヒロシマのイメージをアメリカ人が見る―すなわち、それを許される―までには何年もかかった。ライフ誌は後に、「世界は破壊の物理的な効果し知らぬ」と述べた。

(1) 原爆使用前に、ルーズベルトやトルーマンあるいは「政府の責任あるメンバー」の誰かが、原爆が準備できた段階で使っべきでないことを示唆したことは一度もない。原爆は「どんな他の」致死性の兵器とも同様、「合法的」と考えられていた。

(2) 科学専門委員会の単なる議論の後、暫定委員会は一九四五年六月一日、大統領に対する次のような勧告を採択した。原爆は日本に対し、使用できる早期に使用すべきである。原爆は家庭や建物に閉じられた軍事施設という「二重の目標」に対し、使用すべきである。原爆は軍事の警告に使用すべきである。「地方もないショックだけが、天皇から真の降伏を引き出す。…原爆はこうした目的に、著しく適した兵器である。

(3) 委員会が同意しなかったのはラルフ・バード海軍次官だけで、彼の反対は通告がないことに限定されていた。委員会が非居住区域における公開爆発実験について「注意深く検討した」が、この計画は「軍事的ではなく、危険性で退けられた。原爆は一度実験が行われただけであるから、公開実験が「不発」に終わる可能性があり、そうなら降伏を引き出す努力を阻害する。さらに、われわれには驚かさない原爆はなかった。われわれが当時持っていた少数の原爆で十分効果を得ることが死活的に重要だった。科学専門委員会は、「秘密的な公開実験で戦争を終わらせる可能性は低い。真実的な軍事使用以外に許し得る代案はなかった」と提言した。(スティムソンは注意深く「特長は私による」と書き留めている。

(4) 日本は交渉による降伏を求めているが、条件は「あいまい」で、無条件降伏とは大きく隔たっていた。日本の軍事的決意が弱まっているという兆しはなかった。五百万の兵と五千機の特攻機を持つ「大軍事力」が文字どおり、死ぬまで闘う能力を十分に示した。…原爆は「原爆」に属していた。(5) 一九四五年七月二日、スティムソンは大統領に対し、原爆の使用前に「最後の機会を与える」通告を送るよう促した。ポツダム最後の通告は七月二十六日に提示され、日本は二日後に拒否した。それゆえ、原爆は広島と長崎に投下された。二都市は「日本の戦争遂行努力の活動的な部分」で、広島は「陸軍の中心、長崎は「海軍と産業の中心」だった。

(6) ナガサキの後、「結果を知るため、」行われた。われわれの降伏条件を承認する。日本の最終決定を支配した要素は原爆だった。東京への焼夷弾攻撃は広島への原爆投下よりも大きな物的損害と大被害を出したが、原爆は軍事的手段以上のものだった。「それは心理的な兵器だった」。日本の降伏は原爆が「われわれが意図した目的通り働いた」ことを証明した。

(7) 戦争の額は死である。だが、日本への原爆投下の決定は「われわれにとってもっとも恐ろしい」ことが少ない選択は非常によく引用されることになる。それは焼夷弾攻撃を中止させ、陸軍部隊の衝突を回避した。「広島と長崎の破壊が日本との戦争を終わらせた」。

われわれは、もしこの（修改）計画を実行に移すなら、主要な戦闘は、少なくとも一九四六年後半まで持ち越されるだろうと推定した。私は、こうした作戦が米軍だけで百万人以上の被害を生じる可能性がある、と知らされた。

<d>

▼ 1947 ~ 1990 年の米国世論調査結果から<油井大三郎『日米戦争観の相克』(岩波書店)より>

* ギャラップ調査の比較	1945.8	1947.10
原爆の開発は良いことと思うか	69 %	55 %
悪いことと思うか	17 %	38 %
他国がすでに原爆をつくっていると思う (はい)	42 %	59 %
米国が引き続き原爆を製造し続けるべきか (はい)	61 %	70 %

* ハリス調査の比較	1971	1982	1986
原爆投下は、やむを得なかった	64 %	53 %	67 %
間違이었다	21 %	26 %	24 %

(ただし、投下直後に否定は約 10 % → 倍増)

* CBS 調査 1985.7			
原爆投下は道徳的な誤りだった	強く肯定	20 %	} 38 %
	ある程度肯定	18 %	
	強く否定	25 %	
	ある程度否定	30 %	

* ギャラップ調査 1990.7	全	60 代	20 代
原爆投下を肯定	53 %	67 %	38 %
否定	41 %	26 %	56 %



Conant, J. B. (Conant, James Bryant 1893-1978) 学者でハーバード大学長(1933-53)。科学者を組織し、マンハッタン計画を推進。戦後は原爆投下の正当化に全力を上げた。

スティムソン, H. (Stimson, Henry 1867-1950) 第二次世界大戦当時の戦争長官(1940-45)。都市への無差別爆撃に抵抗を感じ、京都への原爆投下には強く反対した。1947年に原爆投下の権限論文を発表。

バンドイ, M. (Bundy, McGeorge 1919-) 1946年にスティムソンと協力し、原爆正当化論文を執筆。1961年から66年まで大統領補佐官(国家安全保障担当)。

トルーマン, H. (Truman, Harry 1884-1972) 33代の米大統領(1945-53)。1945年4月のルーズベルトの急死で副大統領から昇格。広島、長崎への原爆投下を決定。

<a>~<c> G ミッチェル他『アメリカの中のヒロシマ・上下』岩波書店 <d> 油井大三郎『日米戦争観の相克』岩波書店 史料 C

【資料】

▼ G・ミッチェル他『アメリカの中のヒロシマ・上』(岩波書店)より <①~⑩>

(「」は本書の中で引用されている文)

① 1945.8.6 トルーマン大統領声明

*数ヶ月かけて関係者で検討してきた声明文

「16時間前、米軍機が日本の重要な陸軍基地である広島に爆弾を投下した。この爆弾は、TNT火薬2万トン以上の威力を持つ。これまで実戦で使用された最大の爆弾である英国の「グラント・スラム」(満塁ホームラン)の2000倍以上の爆発力がある。

日本は真珠湾への空からの攻撃で戦争を開始した。日本はその何倍もの報復を受けた。だが、戦争が終わったわけではない。この爆弾によって、わが国は成長を続ける軍事力を補足し、破壊力において新に革命的に増強をとげた。この種の爆弾は現在も製造中で、さらに強力なものを開発中である。

これは原子爆弾で、宇宙の基本的な力を利用して、太陽がその力の源とする力が、極東に戦争をもたらした相手に解き放たれた。」(以下、開発の経緯、日本への警告などが続く)

② 1945.8.7 ベンタゴンから14通の発表文…公式見解

*上記同様、数ヶ月かけて準備

*マンハッタン計画による開発、アラモゴードの実験などもはじめて公表

*「何千人もの米兵の命を救う」「電気の発見やそれ以外の重要な発見より、はるかに重要」「宇宙の基本的な力が解き放たれた」「原爆は三か所の秘密都市で製造」「新時代のさきがけ」「立ち上る大火球が砂漠の太陽を曇らせる」(アラモゴードの実験のこと)「科学と戦争の新時代」「日本、原爆の大被害認める」「原子力時代」

*広島の写真は1枚も公表されず

*これらの文を準備してきたのはニューヨークタイムズ科学記者W. ローレンス 広報担当に任じられ広く取材し執筆 すべて当局が検閲・保管しこの日にまとめて公表

③ 投下後の新聞1 ニュースソースは上記のもの

*社説は、ほとんど例外なく日本への原爆使用を支持 大統領声明の日本への復讐を賛美

*広島の写真掲載なし

*「科学が、この新兵器を戦争終結前におが物にしえたのは無条件に喜ばしい」(ワシントンポスト紙)
(原爆が)「程度において異なるが、種類においては戦争で日常使われている他の兵器と大差ない」(ハートフォード・クーラン紙)

④ 投下後の新聞2 公式発表によらないニュースも出てくる

*UP通信…東京のラジオは、広島を「死体があまりに多くて数え切れない…文字どおり、焼け焦げた」死の町になったと放送。「男も女もまったく区別不可能だ」。街頭で爆発にあった人は生きたまま焼かれ、室内にいた人は倒れた建物に押しつぶされ、医療支援は、市内の全病院が灰燼に期したことで不可能。

*AP通信…日本兵の目撃談(東京のラジオ)を配信。「異様にふくれ、焼け焦げていて一世にも恐ろしい光景が一衣服がはがれた足や体が、焼けて水ぶくれになっている…」

*ニューヨークタイムズ 日本は「爆撃をやめさせるため、政治宣伝を試みている」

⑤ 1945.8月中旬のギャロップ社世論調査

*原爆使用支持80% 不賛成10% 「性別、年齢、教育程度による差がほとんどない」

⑥ 1945.9.2 オーストラリア人戦争特派員W. パーチュットが広島の病院取材

*「広島では、原爆が市を壊滅し、人々が原因の分からないままに、次々に恐ろしい死を迎えている。大爆発にも無傷だった人々が、「原子病」(the atomic plague)としか表現できないような未知の何かが原

因で、…私は世界への警告となるように、できるだけ冷静にこの事実を報告する。」

*英国メディア用だったため、大部分無傷で検閲室通過 9.5に「原子病」という見出しでロンドン・デーリーエクスプレス1面に掲載 世界に転載許可

* (同じ9.5にニューヨークタイムズにも広島発の記事 ただし病院取材記事はなし)

⑦ 米当局による対応

*9月9日からT.ファーレル將軍の調査団を広島に派遣 報告をうけ当局は、日本人が放射線被曝で死んでいたとしても「数は非常に少なく」、十分な医療が受けられないことが部分的な原因、広島では植物生育し放射能レベル極めて低い、と発表

*ファーレルは東京の記者会見で、原爆が残留放射線を生じたという見解を無条件に否定ガンマ線被曝者は認めたが「毒ガスの類はいっさい放出されなかった」と強調 マスコミは毒ガスの否定を重視

*アメリカ記者の広島入りを規制 トルーマンが「重要な国家安全保障に影響がある」と原爆報道の自衛を要請 →日本での原爆の影響に関する記事は数か月途絶えた

⑧ 米当局の日本の新聞検閲など

*1945.9.19 GHQが包括的な新聞検閲指針…事実上、日本の新聞で広島の記事全面禁止

*直後に本に関する検閲 原爆研究の科学論文も無期限留め置き

*検閲は1949.12まで 科学論文はその2年後まで自由な発表不可 原爆は文字通り禁じられたテーマ *映画や写真の規制 45~68の間極秘の記録映画、46~83の間非公開のカラー映画等

写真について →別記 <a>

(アメリカにおける科学者への規制 略)

⑨ 1946には公式見解への正面からの批判が登場…科学者・教会・ジャーナリスト等

*「米国のキリスト者として、原爆の無責任な使用について、深く悔い改めている。戦争に関する原則的判断がどうあろうと、広島と長崎に対する突然の原爆投下が道徳的に弁明の余地のない問題だという点では一致している。…原爆は文字どおり、十万人の死が明白な状況の中で、特別の警告もなしに投下された。」(1946.3.5連邦教会評議会22名のプロテスタント指導者)

*「日本時間1945年8月6日午前8時15分、広島上空で原爆が閃光を放した瞬間、東洋製纜工場人事部に勤務する佐々木とし子は工場の自分の席に座り、隣の席にいる女性に話しかけようと、顔を向けたところだった。」(ハーシー「ヒロシマ」1946.8雑誌「ニューヨーカー」に68頁にわたる読み物として)
*大反響…売り切れ、市長が全市民に、アインシュタイン千部希望、ラジオで朗読他

⑩ 公式見解の再主張

*原爆投下関係者が投下正当化の主張をあらためて明らかにする取り組み

*コナントの勧め バンディらの協力もうけてスティムソンが論文をまとめる。

*1947年2月、雑誌『ハーバース』に「原爆使用の決定」と題して発表

*コナントの指摘 指導的科学者は投下に反対ではなかった、公開実験提案は「現実的ではなかった」、日本は降伏寸前というのは「試合が終わってから戦況を批評するような人」で批判すべき。「論文は主として事実に基づき」書くように。

*主張の概要とその影響 別記 <c>

⑪ スティムソン論文の背後で…

*スティムソンの記事が出てほんの数日後、新しくできた原子力委員会が初会合を開いた。この時点では、米国は十三個の原爆を弾薬庫に持っていたが、すぐ使える状態のものは一発もなかった。議事録によると、きわめて重要なこの会議で、「核兵器と原子炉のどちらに重点を置くかが議論され、兵器の方に優先順位をおくことがほぼ合意された。」水爆を含め、新しい装置の実験や開発、ロスアラモスの再構築、原爆材料製造の拡大に最大の努力を払うことになった。<この部分は、全文上記書より引用>

<e>

歴史の軌跡

第二次世界大戦の終結、原爆そして冷戦の経緯

スミソニアン国立歴史博物館

<f>

原爆投下決定は正しかったか？

原爆投下の議論

史料E

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

三ノ口対戦の日 84

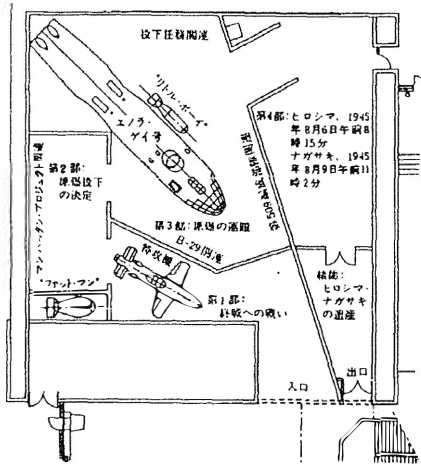


図1 航空宇宙博物館の初期の原爆展示室(1993年7月)

<g> <e><f><h> フィリップ・ノビーレ『葬られた原爆展』五月書房
<g> 油井大三郎『日米戦争観の相克』岩波書店

この展覧会には戦争の悲惨な写真が展示されていますので、子供を連れて入場される方は御注意ください。

「人権の尊重」
「平和の祈り」
「原爆の被害」
「原爆の歴史」
「原爆の未来」
「原爆の記憶」
「原爆の犠牲者」
「原爆の平和」
「原爆の希望」
「原爆の未来」
「原爆の記憶」
「原爆の犠牲者」
「原爆の平和」
「原爆の希望」

反対派の中でも、三〇〇万人の会員を擁し、その半分以上が第二次大戦の爆撃兵だといふ在米軍人会は比較的穏健な立場をとっていた。つまり、原爆被害の展示自体には賛成せず、むしろ、ヒロシマやナガサキが軍事機密ももった都市であったことや原爆投下によって終戦早まり、米兵の犠牲が軽減したという投下の功績も明示すべきだという立場をとっていた。それ故に、一時、航空宇宙博物館側との歩み寄りが見られたが、最も強硬な反対派は空軍関係の爆撃兵で構成されていた空軍協会であった。

空軍協会は一九九四年三月時点で、「スミソニアン協会とエンラ・ゲイ」と題する報告書を作成し、博物館の展示案を全面的に批判するキャンペーンを始めていた。また、早くからエンラ・ゲイの保存活動をしていた空軍の退役軍人たちが中心とするエンラ・ゲイ保存展示委員会は、博物館に対して、「観客が米国のエンラ・ゲイの顕著な功績に誇りをもてるような愛国的な方法でエンラ・ゲイの展示をおこなう」よう求める請願を開始して、空軍協会が報告書を出した時点ですでに八〇〇〇人の賛同者を集めていた。このような動きに後押しされて、空軍協会は展示案を厳しく批判する立場をとった。

たとえば、第一に、米国の犠牲者の説明に比べて、B-29から投下された焼夷弾による日本側の犠牲者の説明がはるかにわくわくし、日本人に同情的すぎること、第二に、日本側の侵略行為の説明を補充してバランスをとったとしても、「ほとんどのアメリカ人にとって、それは報復の戦争であり、日本人にとっては、西洋帝国主義に対する自らの無類の文化を守る戦争であった」という記述は不可解であること、第三に、展示案は第二次大戦における米国と日本をあたかも道徳的に同等であるかのように扱っており、入館者は歴史や軍事ではなく、党派的な解釈を聞かされることになることなど批判した。その上で、展示案は米国の安全保障に果たしている軍隊の役割に敬意を払うべきという、誤差がスミソニアン協会に与えた指示からも乖離している非難もした。つまり、空軍協会は、展示案が米国の国防における軍隊の貢献に挑戦するものであるという愛国的な主張を展開するとともに、原爆投下問題に日本側からの視点も入れて展示しようとしたいわば多文化的な展示姿勢にも強く反発した。事実、空軍協会はその報告書の中でスミソニアン協会が一九八〇年代半ばから多文化的な展示の導入を図っており、今回のエンラ・ゲイの展示案もその延長線上にあると批判していた。

爆撃兵たちのような愛国主義的な主張には政治家もたやすく同調した。その典型が一九九四年九月三日に連邦議会上院で通過した上院決議二五七号であった。

五十年を経て、この問題をめぐる議論はおさまることがない。研究者の多くは、原爆は戦争を早期に終結させ多数の生命を救ったと論じている。たとえ、本土侵攻で出る米軍兵士の死者数が、戦後に行われた推計より著しく低いものであつたとしてもである。他方、原爆投下は必要であつたとする学者たちもいる。トルーマン大統領には戦つたかを選択していたの「ただ」の多くを審判しないがために計画を推進していったのだと認めている。トルーマンに与えられた権限は、米軍兵士の生命と戦争の早期終結のほうがかつと重要であつたといふことである。また、「原爆投下の決定」なるものは存在しなかつたとする歴史家も多い。トルーマンはすでに進行中の作戦準備活動を単に承認しただけであり、「マンハッタン計画」の勢いはいくらもなかった。また、ドイツと日本の都市に戦略爆撃が行われていたことも原爆投下を行うことを容易にしていたと認むのである。

しかし、本土侵攻および事前警告なしの原爆投下にかわる他の選択肢が存在したことは明らかである。例えば、天皇の地位を保障し、原爆の威力を敵にデモンストレーションして見せつけるか、あるいは日本の損害を増大させる海上封鎖、空襲、ソ連参戦の結果を持つたのである。だが、このような選択は、あとから考案するからとて明確に否定するものであり、たとえこれらの方法を取つたとして、はたして日本政府が早期に降伏したかどうかは推測の域を出ない以上、「原爆投下決定」をめぐる賛否両論の議論はこれからは消えることはないであろう。

「原爆症」

最初、広島と長崎で原爆の犠牲者を治療した医者たちは、この爆弾による外傷のひどさや圧倒されてしまった。最初の閃光と浴びて生き残った人々が舌を噛んだり火傷は、特に重篤的で驚くべきものであつた。着物の布が飛んで、皮膚に食い込んできた場合もあった。しかし本物の腫瘍が生じたのは、説明できない食欲の減退、吐き気、嘔吐、異常な倦怠、下痢そして体全体の不調などについてであつた。爆発後二十分から三時間までの間に、生存者の三〇パーセントほどにこれらの症状が単独で現れるが場合によっては八割まで現れた。広島では八月十七日までに、八百八十一人がこれらの症状を示し説明できない死を遂げた。

「わたしの妹はすぐ下痢を始め、それから紫色の斑点が皮膚に出てきました。これが最初のしるしでした。妹はうわごとをつぶやき始めました。水は良傷した者によくないと聞いていました。が、欲しがるだけやりました。私には最後が近いと分かっていたのです」

被爆者

長崎 青木久江

被爆者とは原子爆弾の被害を受けて過去半世紀の間生き延びてきた人々を指す言葉である。被爆者の中には被爆したことを物語るケロイドを依然として持つ人がいる。彼らは友人や肉親の命を奪った体験のあとをおき延びていることに心理的な苦痛を感じている。多くの被爆者たちは、戦後の同胞たちの差別と偏見にも悩まされてきた。というのは、生存者には放射能が残っていると信じられていたからである。被爆者は自分たちが白血病や悪性腫瘍にかかる率が普通の人より多いという事実を知っている。被爆して生き残ることがどんなことであるかは、彼らだけにしかわからないのである。

「人々の皮膚は黒黒げであつた。髪も焼かなくてなくなり、前から見ているのから後方から見ているのから分けられない状態だつた。腕を前に出して垂らし、皮膚は、腕だけでなく肘からも体からも垂れ下がっていた。いまでも思い出せるが、まるで歩く雲のようにだつた」

広島 八百屋店主

<h> 一九九五年一月三十日、陸軍省政治的要請が高まるなか、そして協会の差金引き上げをにおわせる危機が再三にわたつて米国会議からあつたため、スミソニアン協会会長「マイケル・ヘイマン」は、大統領、副大統領、上院の多数派指導者、下院議長、最高裁判所長官、スミソニアン協会理事会等の忠告と同意に基づいて、厄介な展示台本（スクリプト）の発行を停止し、想像を映像と被爆品を展示から撤去するよう命令した。戦前の歴史において最大の犠牲者とした「エンラ・ゲイ」は、まさしく軍部が望んだように、歴史的にも、説明もなく、その飛行がもたらした歴史的破壊をしのげざる被爆品もなく、ただ標体だけが展示されることとなった。



スミソニアン
ようこそ!

計18の博物館、美術館、国立動物園からなるスミソニアンは、世界最大の博物館群です。スミソニアン協会は1億3,650万点もの文化遺産や標本を所蔵し、これを米国で公開しています。また、研究機関としても知られるスミソニアン協会は、公共教育やサービスのほか、芸術、科学、歴史分野での奨学金制度といった、さまざまな活動に力を注いでいます。スミソニアン協会は、1846年に英国人科学者ジェームズ・スミソンが「知識の向上と普及のために米国に寄贈した資金によって設立されました。」

スミソニアンの博物館と美術館は、首都ワシントンのワシントン記念塔から国会議事堂にいたるナショナル・モール地区に立ち並んでいます。その他6つの博物館と動物園はワシントン都市圏の別の場所にあり、クーパー・ヒューイット国立デザイン博物館、国立アメリカインディアン博物館ジョージ・グスタフ・ハイ・センターはニューヨーク市に置かれています。また、スミソニアンで最も新しい博物館となる国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館はワシントン市のナショナル・モール地区に設立される計画です。芸術産業協会は改修のため休館中となっています。

<http://www.si.edu/guides/japanese.htm>

私は、日本に来る前、原子爆弾は日本人にたいする「天罰」だと思っていました。日本軍はあちこちで残忍非道な虐殺をおこなったから、そういう罰を受けたのだ、因果応報であり、天を恨むべきで、人をとがめてはならないとも考えていました。

あまり書きたくはありませんが、「東京にも一発落とすべかった」という人もいます。日本の侵略戦争にたいする怒りによる過激な考えだとも思います。当時日本はもろ降伏せず、戦争がさらにびたり、自分たちの命と安全も保障されないうちで思っていたからです。

近年、日本の大新聞よりも地方紙のほうが、より積極的に日本軍の侵略による被害状況を報道するようになってきました。そのかわり、とうぜん、原爆にたいする見方も紹介されています。

つぎのシンガポール人の見方は、中国新聞、神戸新聞、信濃毎日新聞が引用したコメントです。

「多くの死者を出した原爆も許されない残虐行為だ。原爆も破壊体験も、ふたたび戦争をしないための歴史として語らなければならない」

「原爆記念日に広島、長崎で式典をするのに、外国侵略の事実を反省しないのはなぜか」

「原爆資料館には日本の責任が欠けている。なぜ原爆を受けたのか」という歴史が足りない。」「戦争で日本は米国に負けただけ」という認識はまちがっている」

最初のコメントに見られるように、「原爆は残虐行為だ」と考えている人がいることは、たいへんな変化だとも思います。被害者の私たちが、日本の民衆も同じ被害者だと認識しはじめたということなのです。

五年前、戦争被害者であるマレーシアの鄭さん（鄭さん）と呉さんが、日本の被害者に招待されました。そのさい、広島城跡の第五師団歩兵第一連隊の慰霊碑まで案内されたとき、鄭さん夫婦はそこへ行くのを拒んだのです。マレー半島の各地で住民虐殺をくりかえしていた一連隊の武庫をたたくものだったからです。彼らによって鄭さんの家族はみな殺害にされ、自身も剣で刺殺されたのですが、九死に一生をえて生き残ったのです。

しかし、翌日、被爆した郵便局内の追悼碑の前で、案内役の日本人から説明を聞いて、鄭さんは涙ぐんでいました。中国のことわざで「傷心人皆有（人はだれも同情して哀れむ情をもっている）」というように、日本の民衆もマレーシアの民衆も同じ犠牲者、被害者なのだと思います。鄭さんは涙を流したのです。その犠牲者はとうぜん被害者を含んでいます。このように、被害者に同情するマレーシア人もいます。

しかし、原爆資料館を見学した後、ある被害者が彼らとの交流会で、「アメリカはほんとうに原爆投下を必要としたのかどうか疑わしい」といったとき、被害者たちは「日本が侵略戦争を起さなければ原爆投下はなかったらう」「原爆投下がなければ、日本が敗戦を拒んで、アジアの犠牲が増えたらう」などと、すぐに反論したということです（「軍縮問題資料」、九二年九月号）。

あさらかに、双方の原爆にたいする認識には大きな落差が存在しています。「原爆キープアップ」という人もいます。ただ、被害者たちは弱い民衆の立場に立つと、それは加害者の日本人の問題であっても同情することができません。

私も広島へよく講演に呼ばれていき、平和記念館を二度見学したことがあります。悲惨なまわめた被害者の状況は、日本人以上によく理解しているつもりです。広島を訪れるたびに、いまでも自分がもっていた「天罰観」を修正したくなります。しかし、その修正の条件としては、やはり加害者側の日本人がまず、自国と自身の罪と、起こした戦争責任を認めることが必要だとも思います。

陸奥春『もっと知りたい東南アジア』岩波ジュニア新書

歴史協編『ちやんと知りたい日本の戦争ハンドブック』青木書店

Q12

「三光作戦」とはどのようなものですか

A 南京大虐殺は日中戦争の象徴的な事件ですが、実は規模・範囲においても、犠牲者数においても、日中戦争最大の被害を中国国民にもたらしたものが「三光作戦」だったのです。「三光作戦」という言葉は日中戦争中、華北で日本軍がおこなった徹底（家や物をすべて焼き払うこと）、掃蕩（徹底的に討ち滅ぼしてしまうこと）作戦にたいして、中国側がその実態から「殺光」（殺しつくす）、「搶光」（奪いつくす）、「燒光」（焼きつくす）という言葉をあて、まとめて「三光作戦」と名づけたものです。

日本軍がこの三光作戦を実施するようになったのは、八路軍（華北における共産軍）の「百团大戦」にたいする反撃として始めたという説が多く、それは1940年秋からといわれています。当時八路軍は華北で民衆に支持され、解放区をひろげていました。40年8月から秋にかけての八路軍115団40万人の「百团大戦」と呼ぶ奇襲攻撃は、日本の華北支配に大きな被害を与えることになり、日本軍の対共産軍認識は一変しました。以後、日本軍は八路軍と民衆との分断をはかるため、治安地区と共産党が指導する解放区・遊撃地区との間に遮断線を掘らせたり、八路軍と通じているとみなした部落を急襲して、住民を殺し、食糧を奪い、集落を一軒残らず焼いてしまう作戦をとるようになりました。日本軍指揮官たちは共産勢力を撲滅しなかり治安維持はできないと考え、「従わない民衆」を含めて敵だから、手段を選ばないとして三光作戦を進めていきました。とくに1941年から42年にかけて実施された華北全域にたいする「掃蕩作戦」は凄惨をきわめたものでした。その代表的な例としてあげられるのが河北省定興の北垣村（北垣村）事件です。1942年5月27日、北支那方面軍は奇襲攻撃をおこない、地下道に避難した村びとに毒ガスを使用しました。そのため約1,000名の住民が虐殺されました。この事件は日本軍の記録や指揮官の回想録に残されており、それと中国側村民の生存者の証言が合致しており、非道な三光作戦がおこなわれたことが実証できる代表的な事件です。

三光作戦という用語の使い方はまだ統一されていないこともあり、実態面から日中戦争開始直後に起きた事件にこの用語をあてている例や、華北以外での日本軍の残虐行為をさしていることもあります。しかし現在では、南京大虐殺などのように、ある作戦に伴って発生した偶発的、一時的な残虐行為と、「徹底」そのものを目的とした計画的な作戦とは区別する必要があると考えられています。そして、当初から目的・意識的な作戦としておこなわれた残虐行為が三光作戦であると定義づけがされています。

そのうえ掃蕩戦の対象に一般の民衆が含まれていることを承知して毒ガスを使用したことは、ユダヤ人にたいしておこなわれたジェノサイドと同様の行為が、まさに日本軍によって中国でおこなわれたことを示しています。

（鈴木忠明）

参考文献 根田光栄『三光作戦とは何だったのか』岩波書店、1995/藤原彰『「三光作戦」と北支那方面軍』『季刊戦争責任研究』20・21号、日本の戦争責任センター、1998/石田勇治ほか編『中国河北省における三光作戦』大月書店、2003

封英米開戦（1941年）ののちも日本軍はつねに八路軍のゲリラ戦と住民の難民に悩まされつづけ、敗戦まで70万人から100万人もの兵力を中国戦線にはりつけなければならませんでした。資金調達と中国人弱体化のため、占領地に大量のアヘンを流通させるとともに、生物化学兵器（毒ガスや細菌兵器）まで使用しました。細菌兵器の開発にあたった七三一部隊（関東軍防疫給水部）とその支部では、ペスト・腸チフス・コレラ・流行性出血熱、炭疽などの病原菌を兵器化し、1942年8月の浙贛作戦など中国大陸で実際に大がかりな細菌戦を実施しました。毒ガスも、当初の催涙ガスからくしゃみ性ガスへ、さらにはイペリットやルイサイトなど致死性ガスまで使われました。大本営は、毒ガス（「谷種糧」といいます）は、兵器とともに使用して「敵二比斯使用ノ事実ヲ極シ其衰弱ヲ残ササル如ク注意スベシ」（「大陸指第345号」）と外周に情報が漏れるのを恐れつつ、中国側に報復手段がないことをいいことに、違法な毒ガス攻撃を続けさせました（当時の国際法では毒ガスの製造・貯蔵は認められていましたが、戦争における使用は禁じられていました）。

（一九四〇年）
この作戦は、第一軍作戦部ノ指示により、大がかりに実行された。遂に達成第四、第九旅団もついで、まず太行山脈内の八路軍拠拠地に向って進攻する。進攻が終つたら反撃して復行作戦を行い、徹底的な掃蕩はかかったのである。掃蕩の方法は、第一期首中作戦部執行要綱として、掃蕩目標及び方法として次のように示されていた。

1. 敵及土民ヲ開散スル敵
 2. 敵性アリト疑ムル土民中、十六才以上六十才迄男子
 3. 敵ノ隠匿スル武器庫裏
 4. 敵ノ集積セル武器庫裏
 5. 敵ノ集積セル文書
 6. 敵性部落
- 掃蕩 掃蕩 掃蕩 掃蕩 掃蕩 掃蕩